

柔軟な姿勢で新しい評価を

光畑由佳

(会社代表)

一言で評価と言っても、社会に出てからの評価は学生時代のテストや通知表のように、わかりやすい数字によるものばかりではありません。そして、仕事に対する評価は、学生時代以上に厳しいものかもしれません。私自身も、私の会社も、常に社会の中の厳しい評価にさらされています。そして、その評価は、時代と共にずいぶん変わってきたように思えます。自分自身の活動を振り返りつつ、評価についての事例を幾つか語ってみたいと思います。

私は「モーハウス」という「授乳服」を作る会社を運営しています。授乳服とは、読んで字のごとく、母乳を与えるための服です。今はだいたい市民権を得たこの言葉ですが、私がモーハウスを始めたころは、「授乳服」という言葉すら、誰も知りませんでした。

十七年前、子どもが生後一か月のころ、電車の中で泣かれてしまい、仕方なく公衆の面前で、胸をはだけて授乳しました。私にとってはとても強烈な体験でした。当たり前前に子育てすることに、これほどに困難があることに気がつき、「子育てと社会をつなぐツール」として、授乳服を作り始めました。

しかし、この服は、当初、まったく売れませんでした。お母さんたちの多くからは、「自分が外に出るのを我慢すれば済むことだから」「子育てにお金がかかるのに、自分の物にはお金を使えない」と言われました。

つまり、この服に対する「評価」は、とても低かったわけです。

でも、私は、そうした意見に納得がいきませんでした。

した。私自身がこの服を初めて着た時の、羽根が生えたような気持ち。それは、自分でも想像できなかったほどの気持ちの変化でした。私にとって授乳服は、単なる「育児グッズ」ではない、私自身の生き方を変革するきっかけになるものでした。

授乳服を「いらぬ」と言ったお母さんたちの評価基準は、母親がガマンすることを良しとするものでした。でも、私は、お母さんが笑顔であることは、子どもの笑顔につながると信じ、お母さんたちが楽になることを良しとしたいと思いました。

もし、当時のお母さんたちに評価される物を作ろうとしたならば、私は早々に授乳服をあきらめ、ベビー服や、おもちゃを作ったことでしょう。でも、私は、その評価基準を変えてでも、「授乳服」を伝えていきたいかったです。



▲モーハウスの授乳服を着ての授乳

そして、私は、服を売ることではなく、イベントやサロン、そして赤ちゃんと一緒に働ける「子連れ出勤」を始めました。

例えば、自宅を開放してお母さんたちのサロンを開きました。そこでは、すでにユーザーであるママたちが、赤ちゃんに授乳したり、遊ばせたりしながら、和やかに過ごしています。その姿を見れば、「子育ては独りぼっちで頑張らなくてもいいのだ」と、多くのママたちは気付きます。

また、「授乳ショー」と題し、イベントのステージでお母さんたちに授乳をしてもらったこともあり、ます（もちろん、授乳服を着ているので、胸は見えません）。銀座「授乳パレード」と称した、大勢のお母さんが赤ちゃんに授乳をしながら練り歩くイベントにも参加しました。また、オフィスや東京・青山と茨城・つくばにあるショップでも、スタッフが赤ちゃんを抱っこして働き始めました。

こうしたさまざまな活動を見たり体験したりすることで、多くの方が、「子育ては家の中で閉じこもってやらなくてはいけないものではないんだ」と気

付いてくれます。そして、授乳服を着て、赤ちゃんと共に生き生きと外に出ています。

今振り返ると、こうした活動は、服を売ることではなく、ママたちの「評価基準を変える」ためのアクションだったのだと思います。

こんなふうには、「授乳服」をきっかけに、自由に、笑顔あふれる子育てを楽しむママたちが増え、その子どもたちが、ママの笑顔に包まれる。このことは、物事を自由にしなやかに「評価」した結果、自分らしくいつも笑顔で人生を楽しめるようになるということだと思っています。

次世代に、そんな「評価」の連鎖をしていきたい。未来の担い手に伝えたい。そう思い、高校や大学などで講演を行っています。

現在、かつてない少子化が社会問題となっていてます。実際、例えば講演先の大学生に「子育ては大変だと思う人は？」と聞くと、ほぼすべての学生が手を挙げます。幼い子たちのおままごとでも、お母さん役は人気がない（なぜならお母さんは大変そうだ

から）、とも聞きます。これでは、少子化も当たり前と感じます。

その際、私は、一人の女の子の写真を紹介しました。「ふみちゃん」という一歳半になる子のお母さんは、モーハウスで一年働いていました。ふみちゃんは、お母さんと一緒にモーハウスに来て、抱っこされたり、おっぱいをもらったり、遊んだりしながら育ちました。

私が見せたのは、ふみちゃんが赤ちゃん人形を抱っこしている写真です。それだけではありません。ふみちゃんは片手にノート、片手にペンを持っていました。つまり、ふみちゃんは、ワーキングマザーごっこをしているのです。ふみちゃんにとって、子育てをすることも、働くことも、共に、彼女にとっての明るい未来でしょう。こんなふうには未来を信じて子どもが育っているのを、私はうれしく思います。

与えられた評価基準の中で評価されるように努力するだけでなく、自分が正しいと信じる別の基準をセットする。そんな考えも、時には必要なのではないのでしょうか。

今、私たちは、お母さんたちだけでなく、お母さんにかかわる医療関係者のマインドセット（既成概念から来る思い込み）を変えたいとさまざまな取り組みを行っています。「一人で頑張る子育てが素晴らしい」から、「皆の力を借りて子育てを楽しむことが素晴らしい」に。そのためには、私たちからだけではなく、病院や産院でお母さんと接する医療関係者の理解と協力が、後押しが欠かせません。専門家が集まる学会にもここ数年は参加し、研究発表を行いました。授乳服をデザイン、販売している会社が、医療関係者へのアプローチに重きを置く。これももしかしたら新しい評価を築いているのかもしれない。

「いかに自分で頑張るか」という評価基準でなく「いかに子どもと楽しむか」という評価基準に変われば、子育て観はずいぶん違うものになると思います。

このような私たちの活動は、当初はどんな活動をして「結局営利企業だから」と認められない傾向もありました。NPOにすればよいのに、とも言われました。しかし、これも、ある時期から流れが変

わってきました。「社会起業」という言葉が作られ、企業であろうとNPOであろうと、社会的なミッションを成し遂げることを第一義とする団体があるということが知られてきました。

そして、そのころから、行政などから賞を頂く、つまり「評価」していただく機会も増えてきました。十七年前は誰からも「評価」されなかったモーターハウスの評価は、変わってきたのです。

「評価」とはこんなものなのだと思います。これまでは違う価値軸で計れば、当然ながら、評価は変わります。そして、その結果、「評価」は社会も団体も変え得るのだと思います。

何を評価す

るか。それは、理想を伝え、どうあつてほしいのかを伝えるメッセージなかもしれません。



▲青山ショップでの子連れ出勤